

福山市民の言語使用と言語意識に関する調査報告

尾崎 喜光

灰谷 謙二

1. 不思議な福山市

福山市は不思議なところである。

行政区域としては広島県の一部であるにもかかわらず、岡山県を主たる販売地域とする『山陽新聞』の地域版や全国紙の岡山県のページに福山市の記事が掲載されることがある。福山市は薔薇で有名であるが、2019年5月に開催された「第52回福山ばら祭」については、たとえば『産経新聞』（2019年5月24日）の「岡山」面に記事が掲載されている。東日本の人が読めば、福山市は岡山県にあると思うかもしれない。

また福山市は、広島県の中心地である広島市までよりも岡山市までの方がはるかに距離に近い。JRだと、福山駅から広島駅までが約103kmあるのに対し、岡山駅までは約58kmに過ぎない。

さらに、福山市は旧国名の「備後」の一部であるが、岡山県南の「備前」「備中」とともに「吉備国」の一部をなす。

このように福山市は、広島県にありながら岡山県との近接性や共通性を有する。また人口も約46万人と規模が大きく（岡山市の人口は約72万人）、その存在感は小さくない。言葉の点でもこの大きな都市が岡山市に近いのか、それとも広島市に近いのかが目される。

こうした問題意識から、福山市民の言語使用や言語意識がどのようなのかについて、執筆者のうち尾崎が2013年に実施した岡山市民を対象とする調査結果と一部比較しつつ、岡山市との共通性や相違性を明らかにすることを主たる目的とする調査研究を、福山市民を対象に共同で実施した。本稿はその研究成果の一部である。

なお、方言的な表現の使用に関する岡山市と福山市の比較については尾崎喜光(2020)で一部行なっていることから（動詞の打消し、打消し過去、アスペクト）、本稿の尾崎担当箇所では次の4項目の使用について分析する。

- ①「～でなしに」という表現。「それなしに不可能である」のような「なしに」ではなく、「そうでなくて」という意味での「そうでなしに」のような表現
- ②「(ページを)めくる」という意味での「(ページを)はぐる」
- ③「クルマがぎりぎりですれ違う」という意味での「離合する」の使用
- ④「いっしょに行こうよ」という意味での「いっしょに行こうや」という終助詞「や」の使用

いずれも地域差を伴う表現として従来あまり注目されてこなかった表現である。なお、これらの表現についてはいずれも後発の福山市でのみ調査していることから、岡山市との比較は今後の課題とし、福山市での使用が現在どうなっているかという観点

から、一部東京都での調査と比較しつつ分析を行なう。なお、方言的な表現の使用については、福山市調査を企画・実施する以前に岡山市についてのみ、男女差という観点から尾崎喜光（2017）でも分析している（断定の助動詞、形容詞の推量形、間投助詞の「な」）。

一方、灰谷の担当箇所では、次の2項目の使用について分析する。このうち⑤については岡山市との比較も行う。

⑤ ai 連母音の融合

⑥ ナ行文末詞（終助詞）「ナー」「ノー」「ネー」

2. 調査概要

岡山市調査の詳細についてはその最初の分析論文である尾崎喜光（2014）で、また福山市調査については尾崎喜光（2020）で説明していることから、ここでは要点を簡潔に述べる。^{注1}

調査はいずれも調査会社に委託して行なった。回答者の抽出方法、人数、調査時期は次のとおりである。

- (1) 岡山市：人口比に応じた確率で無作為に選ばれた岡山市8地点の中から、性別・年齢層について母集団の構成比を反映するよう層化して無作為に選ばれた20歳～79歳の男女81人。調査方法は個別面接法。実査は2013年10月～11月に実施。調査員は5名。
- (2) 福山市：岡山市での調査と同様の方法で選ばれた福山市8地点の中から、やはり岡山市での調査と同様の方法で選ばれた20歳～79歳の男女80人。調査方法は個別面接法。実査は2018年10月～11月（女性40人）、2019年5月～6月（男性40人）の2年に分けて実施。調査員は6名。（いずれも岡山市調査とは別の調査員）

3. 分析

3.1. 「～でなしに」

共通語で「～で（は）なく」と言うところを岡山県では「～で（は）なしに」と言うことがある。「なく」を「なしに」とするのがポイントである。総社市のある会議の場で2018年に採集した用例を示すと次のようである（発話者は80代の男性）。

- ・「それだけでなしに」
- ・「今までどおりでなしに」
- ・「あれだけでなしに」

筆者（尾崎）が勤務する大学の事務職員からは、共通語が主体となる丁寧体の中でこの表現を聞くことも少なくない。このことから、この表現を共通語と意識している人もいることが垣間見える。

一般に共通語が主体となる新聞のインタビューの記事や雑誌の書き言葉にもこうした表現を見ることがある。

『産経新聞』の連載インタビュー・コラム「話の肖像画」に、物理学者・江崎玲於

奈氏（1925 年、大阪府生まれ）の次の用例が見られる。インタビューで発言した言葉は記事化に際し多少なりとも整えられると考えられるが、そうした中であってもこの表現が見られる点が注目される。

・「チャンスは全く偶然ではなしに、」（第 1 回；2018 年 11 月 26 日掲載）

・「頭脳流出ではなしに」（第 3 回；2018 年 11 月 28 日掲載）

・「「向こうに取られた」と考えるのではなしに」（同上）

もっとも共通語の「で（は）なく」も、次のように用いられることがある。

・「物理学賞だけでなく、」（第 4 回；2018 年 11 月 29 日掲載）

ファーストリテイリング会長兼社長・柳井正氏（1949 年、山口県生まれ）の次の用例も見られる。

・「制度をつくるということではなしに、」（第 11 回；2019 年 8 月 23 日掲載）

月刊誌『正論』（2019 年 3 月号）の寄稿には、作家・石原慎太郎氏（1932 年、神戸市生まれ）の次の用例が見られる。

・「当時政府によって一方的に徴用されたのは何も朝鮮人だけではなしに日本の国民の多くも同じことだった。」（p.32）

さらに、ある研究機関の元同僚（1959 年、愛媛県生まれ）にも次の用例が見られた。

・「機械じゃなしに、」（2018 年 10 月 22 日採集）

こうしたことを考え合わせると、この種の表現は岡山県のみならず広く西日本で用いられていることが推測される。

なお、「なしに」自体は次のように共通語でも用いられている。

・「支持しない、異なる考えを包摂することなしに、（安倍首相は）残り 2 年余の自民党総裁任期を全うするつもりなのだろうか。」（2019 年 7 月 7 日付『朝日新聞』「問う 2019 参院選 第 1 回」〔政治部次長・松田京平〕）

このほか作例ではあるが「それなしには不可能である」「部長の了解なしに進めた」といった表現もある。「なしに」の直前はいずれも名詞ないしは名詞相当の語句であり、これにイ音便化する以前の古典文法による形容詞「なし（に）」を後続させ、それが存在しないことを表してさらに述べ続ける用法である。これに対し本稿で取り上げる「なしに」は、名詞ないしは名詞相当の語句を「で（は）」（「じゃ」）で受けてそれを否定し、さらに述べ続ける補助形容詞的な用法である。まさに共通語の「で（は）なく（て）」（「じゃなく（て）」）に相当する。この用法による「なしに」を、福山市においてどの程度の割合の人が用いているかを調査した。

設問と選択肢は次のとおりである。設問中の「このように」とは、回答者の手元に置いてもらった「回答票」（選択肢等が書かれたカード）に大きく書かれた「そうではなしに」という表現である（下線は回答票にも付してある）。調査員による発音の不自然さや調査員間の発音の不統一を避けるため、調査員の声ではなく文字により表現を提示した。

Q1. いろいろな言葉についてお聞きます。

(8) 「そうじゃなくて」ということを、自分でこのように言うことはありますか？

- (ア) 言うことがある
- (イ) 言わないが聞いたことはある
- (ウ) 言わないし聞いたこともない
- (エ) わからない

結果は図1のとおりであった。なお、「わからない」の回答はなかった。

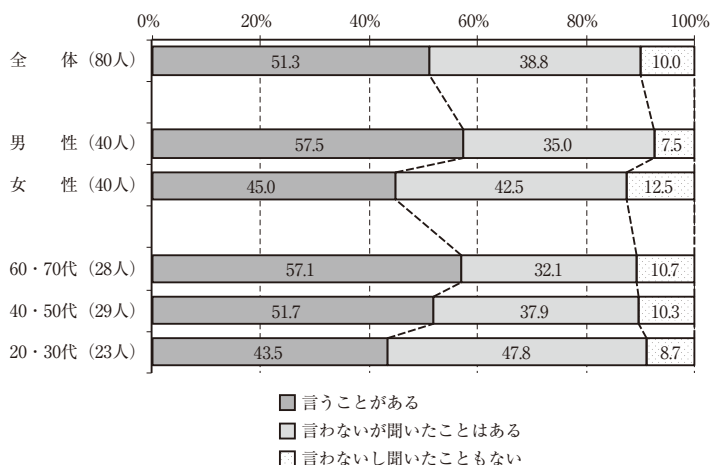


図1 「そうでなしに」の使用者率（福山市調査）

「全体」を見ると約半数が「言うことがある」と回答しており、福山市において一定程度の使用者率が見られることがわかる。「言わないが聞いたことはある」も約4割と少なくなく、これを含めて考えると、ほとんどの市民が言語生活の中でこの表現に接している。

男女別に見ると、「言うことがある」は男性が約6割であるのに対し女性は5割に満たない。男女とも使用者率は一定程度見られ、その差も顕著というほどではないが、どちらかという女性よりも男性での使用者率が高い表現と言えそうである。

年齢層別に見ると、「言うことがある」の数値は若年層になるに従い一貫して減少傾向を示すのに対し、「言わないが聞いたことはある」は逆に増加傾向を示す。年齢が高くなるに従い理解語彙から使用語彙にシフトすることが年齢層の違いとして現れている可能性も考えられるが、共通語にない表現であることを考えると、むしろこの表現の使用の衰退が年齢層の違いとして現れている可能性の方が高いように思われる。

この種の表現は福山市のみならず、岡山県を含む西日本で広く用いられていること

が推測されるが、共通語の基盤となっている東京都での使用状況について調査した。

実査は福山市調査を委託した調査会社と同じ調査会社に委託し、2018年10月から2019年3月の間、無作為に選ばれた1,049人を対象に実施した（JSPS 科研費 JP18H0067「研究代表者・尾崎喜光」による）。質問文と選択肢は次のとおりである。質問文の「このように」とは、「回答票」に書かれた「そうでなしに」である。

Q2. 次に、言い回しなどについてお聞きます。

(9) 「そうじゃなくて」ということを、このように言うことがありますか。

(ア) 言うことがある

(イ) 言わない

(ウ) わからない

結果は図2のとおりであった。

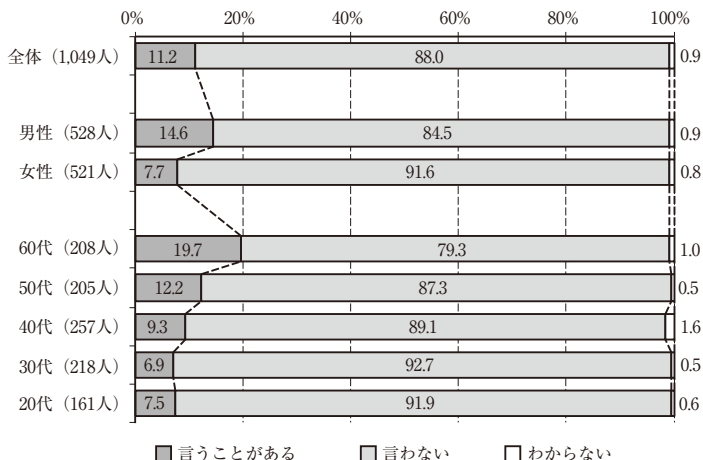


図2 「そうでなしに」の使用者率（東京都調査）

「全体」を見ると「言うことがある」は1割程度に過ぎないことがわかる。福山市の「言うことがある」が約半数であったことと比べると使用者率は著しく低く、共通語の基盤となっている東京都ではこの表現を使う人が少ないこと、逆に言えばこれは方言的な表現であることが確認される。

男女別に見ると、「言うことがある」は男女ともに少ないが、女性が約8%であるのに対し男性は約15%であり、東京都でもどちらかといえば男性の使用者率が高い。年齢層別に見ると、60代では「言うことがある」が約2割いる。少数であることに変わらないものの、一定程度見られる点は注目される。これが若年層になるに従いほぼ一貫して減少傾向を示す。ただし20代でも約1割と“低止まり”しておりゼロに

近い状況にまでは至っていない。こうした年齢差は、先に述べた福山市の場合と同様、年齢が高くなるに従いこの表現を使い始める人が現れるという可能性も考えられるが、むしろ東京都においても衰退していることが年齢差として現れている可能性の方が高いように思われる。なお、60代での使用者率は、他の年齢層よりも高い約2割であることを考えると、かつての東京都では現在よりもこの表現が用いられており、地域差も現在ほど明確なものではなかった可能性も考えられる。

なお「なしに」は『日本国語大辞典 第二版』（2001年、小学館）で立項されているが、形容詞「なし」に助詞「に」が付いた連語と説明がなされ、語義も「無くて。あらずに。無いのに。」とされていることから、本稿で論じる用法とは異なるものである。

形容詞ではなく補助形容詞としての用法ということであれば、使用頻度はそれほど高くないと思われるが、たとえば「感謝するわけでもなく」という意味での「感謝するでなしに」のような用法がある。本稿で論じた「なしに」と関連があるかもしれない。

こうした「なしに」がどのような経緯で生じたのか、全国での地域差はどのようなものになっているのか、また地域差が生じたか経緯はどのようなものであるのかについての説明は今後の課題である。

3.2. 「(ページを) はぐる」

資料などのページをめくることを岡山県では「はぐる」と言うことがある。フォーマルな会議の場で「(資料を) 1枚めくってください」という意味で「1枚おはぐりください」と用いられることがある。

『日本国語大辞典 第二版』（2001年、小学館）には「はぐる」が立項されているが、「本などの頁をめくる。また、おおってある物などを剥いで下の物を出す。まくりあげる。」と語義の説明がなされている。最初の語義の用例として、一世紀以上前の夏目漱石『こゝろ』（1914年）の「私は先生の手紙をただ無意味に頁だけ剥繰（ハグ）って行った」が示されている。現代の共通語では「おおってある物などを剥いで下の物を出す」という意味でしか用いられていないが、かつては「本などの頁をめくる」という意味でも用いられ（めくると下にあるページが現れるわけであるから中核的な語義は一つであろう）、その用法が現在も残っているものである。フォーマルな場面で用いられるのは、「はぐる」自体は共通語でも用いられていることに加え、もともと日本語にこの意味があったことにもよると考えられる。福山市での使用を調査した。

設問と選択肢は次のとおりである。設問中の「このように」とは、「回答票」に大きく書かれた「はぐる」という表現である。

Q1. いろいろな言葉についてお聞きします。

(1) 本のページをめくることを、このように自分で言うことはありますか？

(ア) 言うことがある

(イ) 言わない

結果は図3のとおりであった。

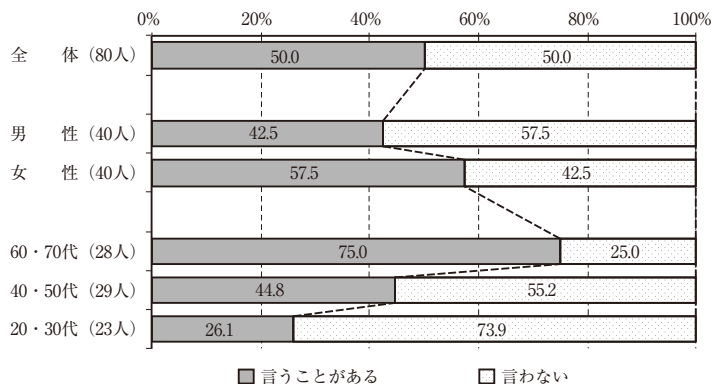


図3 「(ページを)はぐる」の使用者率(福山市調査)

「全体」を見ると半数が「言うことがある」と回答しており、福山市においても一定程度の使用者率が見られることがわかる。

男女別に見ると、「言うことがある」は男性が約4割であるのに対し女性は約6割である。先に見た「そうでなしに」と異なり、どちらかというとな男性よりも女性での使用者率が高い表現と言える。

年齢層別に見ると、60・70代では「言うことがある」が75%にのほりかなり一般的であるのに対し、若年層になるに従い数値は一貫して減少し、20・30代では3割弱にまで縮小する。年齢層による違いが非常に顕著に見られる。フォーマルな会議で用いられるということを考えると、社会に出てから使い始める(＝年齢が高くなると使い始める)という「成人語」的な面も考えられるが、現代の共通語にはない用法であることを考えると、この表現の使用の衰退が年齢層の違いとして現れている可能性の方が高いように思われる。

では、表現自体は共通語にもあるこの用法は、福山市だけでなく日本全国でも使われる共通語の用法と意識されているか否かについて、下記の設問と選択肢によりさらに質問した。なお、直前の設問で「はぐる」をすでに話題にしていることから、本設問では「ページをはぐる」を口頭で提示した。

Q1. いろいろな言葉についてお聞きます。

(2) 「ページをはぐる」という言い方は、日本中どこでも使っていると思いますか？

(ア) そう思う

(イ) そうは思わない

(ウ) わからない

結果は図4のとおりであった。

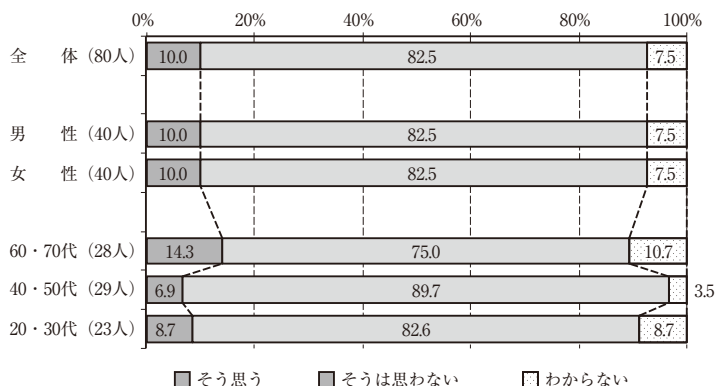


図4 「(ページを) はぐる」は日本中どこでも使っていると思うか (福山市調査)

「全体」を見ると、「そう思う」と回答した人は1割にとどまることが分かる。逆に「そうは思わない」は約8割にのぼり、ほとんどの人は日本中どこでも使っている表現ではない、すなわち地域限定の表現 (方言) であると意識していることがわかる。性別や年齢層による違いはあまり見られない。

全体としては、「はぐる」を使う人も方言的な用法と意識しつつ使っているということである。

3.3. 「離合する」

岡山県と福山市の言葉の違いについて探り始めるべく、岡山県和気町出身で福山市に勤務している筆者 (尾崎) の元ゼミ生に半構造化インタビューを行っていたとき、福山市ではクルマがぎりぎりですれ違うことを「離合する」と言うと言っていた。

この「離合する」は、タレントのタモリが司会を務めるNHKの紀行・教養バラエティ番組『プラタモリ』で彦根市の歴史と地形をテーマとした回 (2017年12月9日放送) に、彦根城について説明していた学芸員が「離合」を使ったことから、その人の出身は九州ではないかとタモリが推測したことで話題になった表現である。

これが岡山県では使われていないが福山市では使われているという、元ゼミ生の指摘であった。そこでこの表現の使用を調査することとした。

設問と選択肢は次のとおりである。設問中の「このように」とは、「回答票」に書かれた「離合（りごう）する」という表現である。

Q1. いろいろな言葉についてお聞きします。

(3) 狭い道でクルマがぎりぎりにすれ違うことを、このように自分で言うことはありますか？

- (ア) 言うことがある
- (イ) 言わないが聞いたことはある
- (ウ) 言わないし聞いたこともない
- (エ) わからない

結果は図5のとおりであった。なお、「わからない」の回答はなかった。

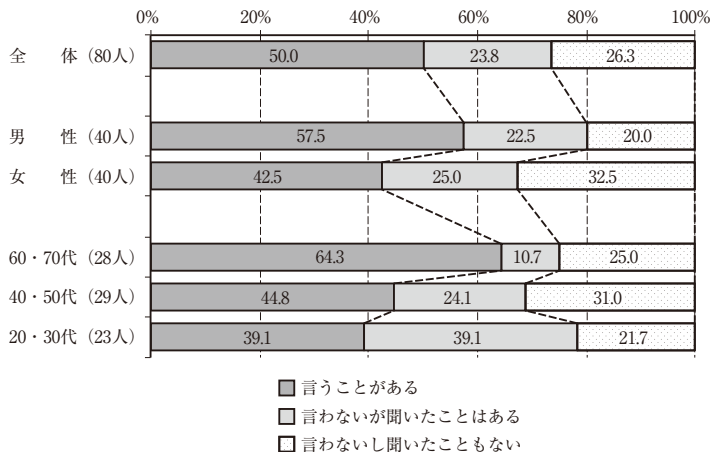


図5 「離合する」の使用者率（福山市調査）

「全体」を見ると半数が「言うことがある」と回答しており、福山市においても一定程度の使用者率が見られる表現であることがわかる。「言わないが聞いたことはある」まで含めると、福山市では約7割が接している表現である。

男女別に見ると、「言うことがある」は女性が約4割であるのに対し男性は約6割であり、どちらかという女性よりも男性での使用者率が高い。

年齢層別に見ると、60・70代では「言うことがある」が約6割と半数を超えるが、若年層になるに従い一貫して数値は減少し、20・30代では約4割にまで縮小する。年齢層による違いが顕著に見られる。もっとも、若年層でも使用者率が著しく低いと

いうわけではなく、「離合する」を自ら使う人は一定程度いる。自家用車を運転するようになってから使うであろう表現であることを考えると、10代から20代になる際に使い始める面もありそうであるが、共通語にはない表現であることを考えると、この表現の使用の衰退が年齢層の違いとして現れている可能性が高いように思われる。

『日本国語大辞典 第二版』（2001年、小学館）には「離合」が立項されているが、「離れることと合うこと。離れたり集まったりすること。」と説明がなされているのみで、「クルマがぎりぎりですれ違ふ」等の説明は見られない。こうした意味での「離合する」がどのような経緯で生じたのか、研究の発端となった岡山県での使用はどうか、全国での地域差はどのようになっているのか（おもに西日本で使われているのか）等についての説明は今後の課題である。

3.4. 終助詞「や」

筆者（尾崎）が岡山市で学生同士の会話を聞いていると、「一緒に行こうや」のような終助詞「や」を聞くことが少なくない。共通語では終助詞「よ」が現れる文脈である。こうした＜勧誘＞という言語行動場面での「や」の使用者率について、これと置き換え可能な共通語の「よ」「ぜ」、そして中国地方に分布していることが予想される方言形の「で」とあわせて調査した。

設問と選択肢は次のとおりである。回答者が使う表現は一つとは限らないことから、使う表現を全て選んでもらった。「(M. A.)」とは「複数回答可」の意味である。

Q4. 次に、ほかの人と会話をするときの言い方などについてお聞きます。

(11) 友達を誘うときの言い方ですが、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。(M. A.)

(ア) いっしょに行こうよ

(イ) いっしょに行こうや

(ウ) いっしょに行こうで

(エ) いっしょに行こうぜ

どれも言わない

結果は図6のとおりであった。なお、どれも言わない回答者はいなかった。

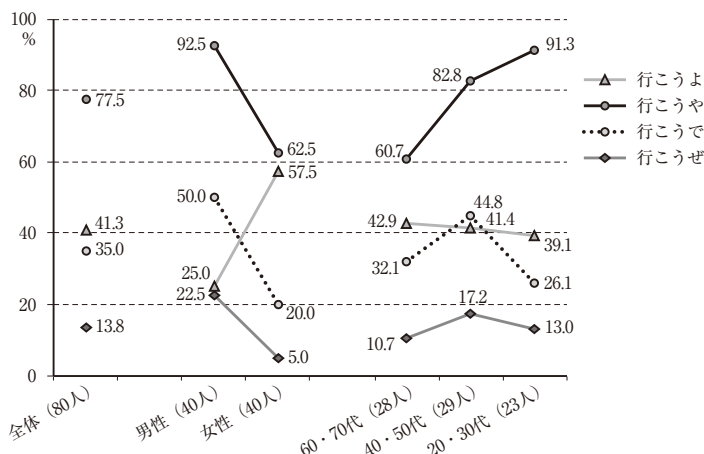


図6 「行こうよ」等の使用者率（福山市調査）

終助詞「や」に注目すると、「全体」での使用者率は約8割にのぼり、福山市においても非常に一般的な終助詞であることがわかる。共通語で最も一般的と考えられる「ね」も用いられてはいるが、「全体」での使用者率は約4割にとどまり「や」の半分程度である。「ぜ」はさらに少なく1割程度に過ぎない。一方、方言形の「で」は、高い使用者率ではないもののおよそ3人に1人にあたる35%が用いており、一定の勢力を持っている。

男女別に見ると、終助詞「や」の使用率は女性でも約6割と高いが、男性はそれ以上に高く約9割にのぼる。男性であればほとんどの人が用いている。「や」は基本的に男女共通に用いる表現であるが、相対的には、女性よりも男性の使用率が高い。これと同様の傾向を示すのが「で」である。一方、これらと逆に女性での使用者率が高いのは「よ」である。女性は約6割が用いている。この数値は「や」の数値とほぼ同じである。大きくまとめるならば、主として「や」（と「で」）を使うのが男性、「や」とともに「よ」も使うのが女性、という違いである。

年齢層別に見ると、終助詞「や」は若年層になるに従い数値が一貫して上昇する。60・70代でも約6割が用いており使用者率は低くないが、40・50代で約8割、20・30代で約9割に達する。若年層はほとんどの人が用いる表現となっている。近しい人を誘う場面で用いる終助詞として「や」は一層定着に向っている可能性が考えられる。なお、「や」以外の終助詞については、年齢層による顕著で一貫した数値の違いは認められず、一定程度の使用者率で安定している。

本研究で最も注目した終助詞「や」は、共通語の基盤となっている東京都においても、ややぞんざいなニュアンスを伴いながら多少は用いられているように思われる。

そこで、福山市とほぼ同じ次の設問と選択肢により、先に見た「そうでなしに」と

同じ調査の一項目として東京都で調査した。なお、低文体における東京都での普及を把握するという観点から「行くべ」も合わせて調査した。

Q2. 次に、言い回しなどについてお聞きます。

(16) 友達を誘うときの言い方ですが、次の言い方のうち、自分で言うことができるものをすべて選んでください。(M. A.)

(ア) いっしょに行こうよ。

(イ) いっしょに行こうや。

(ウ) いっしょに行こうぜ。

(エ) いっしょに行くべ。

どれも言わない

結果は図7のとおりであった。なお、どれも言わない回答者は2.2%に過ぎなかったことからグラフ化は省略した。

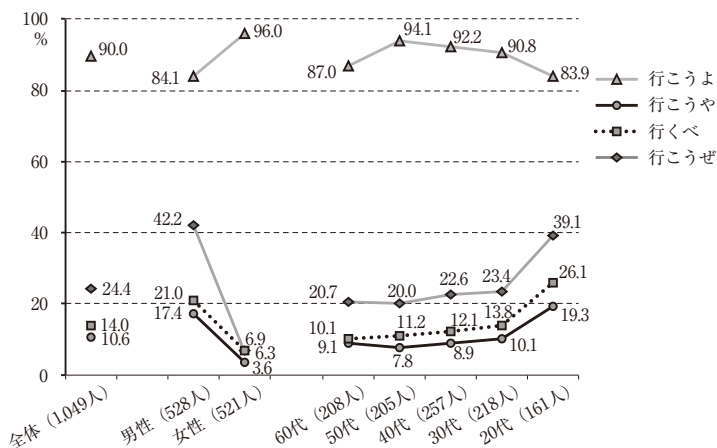


図7 「行こうよ」等の使用者率（東京都調査）

「全体」を見ると、東京都では終助詞「よ」の使用者率が約9割にのぼり非常に一般的であること、性別で見ると女性はほとんどの人が「よ」を用いていること、年齢層による顕著な違いは見られず高い数値で安定していることなどがまずわかる。

本研究で最も注目した終助詞「や」は、東京都においてゼロではないものの使用者率は非常に低く、「全体」では約1割にとどまっていることがわかる。福山市での使用者率が約8割であったことを考えると地域差が明確に認められ、終助詞「や」は方言としての表現であることが確認される。

数値は低いながら東京都の「や」にも男女差が認められる。女性では「や」を使う

人がほとんどいないのに対し、男性では2割程度いる。使うとすれば男性である。

この終助詞「や」の意味・機能の記述に先立つ作業として、漫画等の台詞から使用状況を記述している中崎崇（2014）は、働きかけ表現形式に「や」が付加する場合は、特別な状況でなければ男性のみが用いること、中でもぶっきらぼう・粗暴といった人物像を持つ男性が用いることを述べているが、実際に男女差が存在することが本調査で確認された。「や」を用いる男性においても使用者率が2割程度とそれほど高くないのは、東京都においては「や」にはぞんざいなニュアンスが伴うことから、誰でも普通に使える表現とはなっていないためであろう。

年齢層別に見ると、「や」の使用者率はどの年齢層でも低いが、20代から10代にかけて1割ほど上昇している点が注目される。低文体での表現として東京都でもある程度普及しつつある可能性が考えられる。

福山市との比較という点では直接的な関係はないが、古典語の「べし」に由来する「べ」を含む「行くべ」の使用者率が東京都でも「全体」で14%見られる点、使用者率は女性よりも男性に傾く点（男性は約2割が使用）、若年層に向けて数値の上昇傾向が見られる点（20代では3割近くが使用）を指摘しておく。また、終助詞「ぜ」の使用者率は「全体」で2割強である点、男女差が著しく男性は約4割が用いている点、20代では約4割が用いている点もあわせて指摘しておく。

勧誘場面における終助詞の全国的な分布状況については、『方言文法全国地図 第5集』所収の「第236図 行こう[よ]」により、今から30～40年前の高年層（男性）の状況を見ることができる。

これによると、終助詞「や」は近畿以東にも散発的な分布が見られるものの、まとまった分布は中国地方全域、四国の瀬戸内側（特に愛媛県）、熊本県・佐賀県を除く九州に見られる。福山市での高い使用者率も、こうした地理的・歴史的背景を受けてのものであると考えられる。

なお終助詞「や」は、格闘技等で対戦相手を挑発する際に使うことのある「かかってこいや!」のように、動詞や補助動詞の命令形に下接して用いる場合もある。終助詞「よ」と較べるとぞんざいでワイルドなニュアンスが著しく、低文体かつ低頻度での使用でもあることから言語研究の対象として正面から論じられることはあまりないが、こうした用法での「や」との連続性もおおいに考えられ、今後詳細な分析が望まれる。

3.5. ai 連母音の融合

中国地方方言ではai連母音の同化形式として、岡山でe:、備後南部で相互同化æ:、安芸でa:の形式をとることが知られている（図8）。福山はこのなかで相互同化のæ:の使用地域となる。

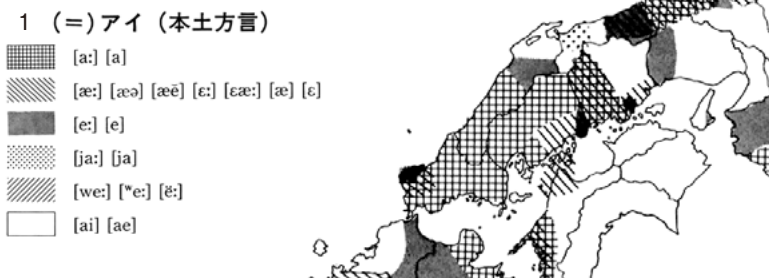


図8 中国地方方言の ai 連母音同化状況 (『日本方言大辞典』小学館「音韻総覧」より)

しかしながら、この形式も8年前の調査で若年層には用いられなくなっている様子が報告されていた。甲南大学方言研究会 (2011) によると、「〔箱が〕小さい」をコミヤーで回答したのは、福山市大門から同松永の範囲の中・老年層男性、女性は老年層女性となった。松川真由 2009「広島県福山市方言の圏域性と動態についての研究」(2008年度尾道大学卒業論文) の調査でも若年層では松永と福山の間に壁をみせた。しかも限定的な用法になりつつある様子も見られた。

地域	性別	年齢		文例
福山	女	21	△	アタマイテー
	男	21	△	イテー
	女	22	○	イチャー
	女	22	◆	イタイ
	女	20	○	イチャー
松永	女	22	◆	アタマイタイワー
	女	22	◆	アタマイタイ
	女	22	◆	イタイ
尾道	女	21	◆	アタマイタイ
	女	21	◆	アタマイタイ
	男	26	□	イター
	女	25	□	イター
三原	女	22	◆	アタマイタイワ
	男	22	△	アタマイテー
	男	25	□	イター
	男	22	△	イテー
	女	19	□	イター

図9 福山から三原にかけての若年層の ai 連母音同化例

松川真由 2009「広島県福山市方言の圏域性と動態についての研究」(2008年度尾道大学卒業論文) より

今回の調査では「くさい、赤い、長い、いっぱい、行きたい、大根」がai連母音融合の項目となる。福山の伝統的方言形式として、クシャー、ナギャー、ダーコンを選択肢として用意し、それぞれ15名、9名、4名の回答があった（図10）。

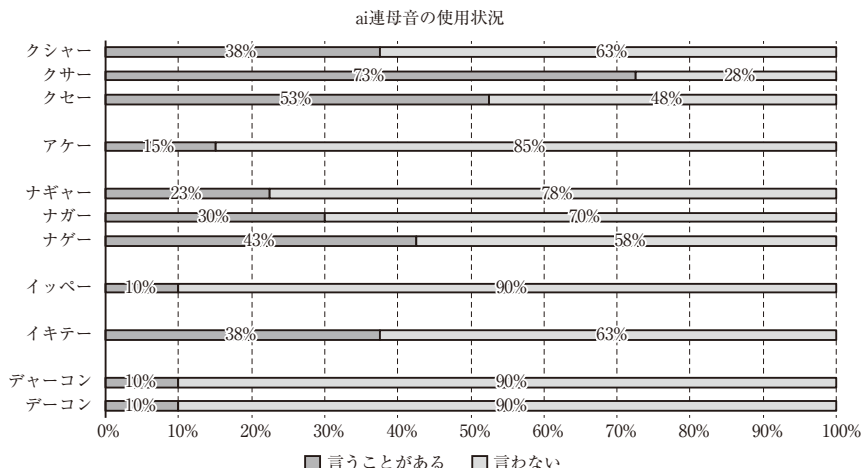


図10 ai連母音の語別使用状況

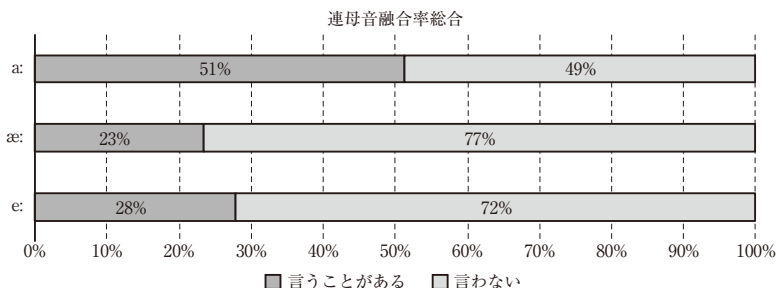


図11 連母音融合率総合図

これを母音別に整理すると、図11のようになる。æ:の使用率は23%となっており、他の形式に比べて低いこと、岡山に近いe:や、広島に近いa:の率が勝っており、相互同化形æ:は基本的に衰退傾向をみせていることが分かる。a:の率の高さが意味するものがなにかが問題になる。備後域の特徴を捨て、地方中核都市としての安芸方言形式へ移行している状況とみることもできる。拗音形式の直音化が容易であり、「クサッ」「ナガッ」等、若年層に使われる、活用語尾を促音化する形式が意識されてa:系が回答された可能性もある。これについては今後の検討課題としたい。

このような連母音同化も、構造的に発生するわけではなく、語によって傾向が違ふことは、すでに尾崎喜光（2014）が岡山調査で指摘したことである（図12）。そこで

は文法的な観点から下記のような傾向差があることがわかっている。

名詞≦動詞<「名詞+動詞」≦副詞<形容詞型助動詞≦形容詞

副詞≦名詞≦動詞≦「名詞+動詞」<形容詞型助動詞<形容詞

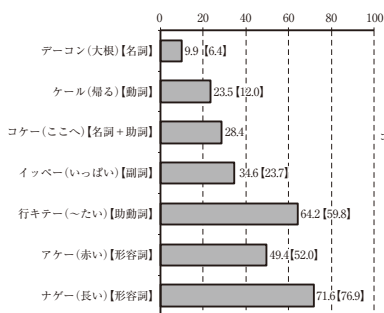


図 12 岡山 (ai:ae:oe ⇒ e:)

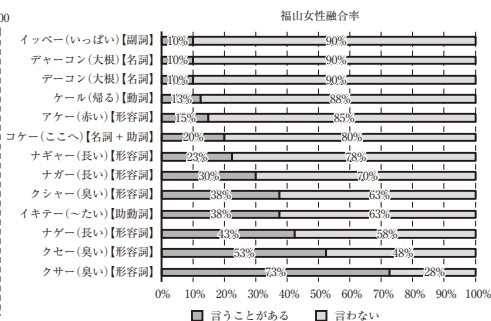


図 13 福山女性 (ai ⇒ a:e:æ:)

図 12 と同様、図 13 でも基本的に動詞・名詞の率が低く、形容詞によくあらわれる傾向がある。比率に関しては福山データは 3 系の融合系を個別に示しており、直接比較がしにくい、やや岡山の使用率が高いといえよう。

このような文法的性質にくわえ、意味的な観点で融合系の維持にかかわるのではないかという予想がたつ。「くさい」は、福山調査企画にあたり、意味的にネガティブなもののように融合形式が出やすいのではないかという仮説のもとに項目を追加したものである。これらの形容詞のなかでも使用率の高いものと低いものがでる。

赤い < 長い・行きたい・臭い

これらの語の配列が意味するところを、属性的なものから、より主観性の強い評価的意義と結びついたものと考えてみる。単純な属性の表現よりも、感動詞的な用法のなかで強い感情の発露と結びつくネガティブなものに方言形式が残しやすいのではない、さらにいえば単純な属性の説明ではなく、詠嘆的、感動詞的な用法の強い感情の発露とむすびつきやすいものではないとも予想される。話し手の表現態度を示す、陳述の要素としてこの連母音融合が選択されているという言い方もできるかもしれない。

3. 6. ナ行文末詞

瀬戸内海方言では、図 14 にみられるように、ナーは近畿方言の流れで東から西に広がり、香川・岡山以东に分布するものとなる。

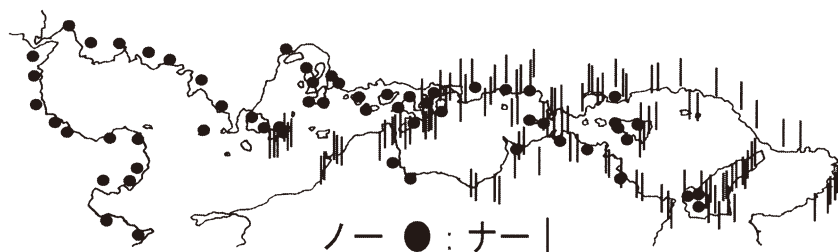


図 14 瀬戸内海域におけるナ行文末詞の概念図
 (『瀬戸内海言語図巻』Fig96 ナー・ノー・ネー・ニー (文末詞) を編集)

このナーは、呼びかけ性がある点で共通語の用法と峻別される。瀬戸内海域方言では全域にノーが一般的であったが、共通語との関係のなかで使用場面を減じた。結果的にナーの勢力が及ばない西の方との対立の中で、安芸はノー、備後はナーというような区分が発生する。そこに共通語系のネーがやや上品なものいいとして被る結果、尾道はナーの地域とノーの地域の境界線におかれることになる。概念的に描けば図 15 のようになる。ノーが普通で、ナーが上品なものいい、という二重構造だったと考えられるが、今の尾道の若年層にはナーもノーが聞かれにくい。福山はまだこのナーの勢力が強いとみていたが、方言的なものとして消えていく可能性がでてきた。

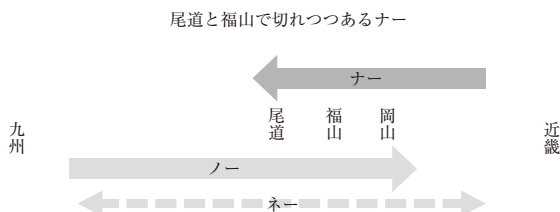


図 15 尾道における・ノー・ナー・ネーの重なりと関係

調査の設問と選択肢は、独話ではなく、親しい間柄で「これうまいねえ」と同意要求をし、相手に呼びかけることが確実にわかる場面設定になっている。品位感が関与することを考慮し、設問は「うまい」と「おいしい」を組み合わせたものにしてある。

- (12) あなたが家族や友達とアイスクリームを食べているとします。一口食べてとてもおいしかったので、家族や友達に「これ、うまいねえ」と言うとして。次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

- (ア) うまいなあ (エ) おいしいねえ
 (イ) うまいねえ どれも言わない
 (ウ) おいしいなあ

図 16 をみる。まず、「うまい・おいしい」の差を考慮せず、「ネー・ナー」を「言う」と答えたものの全体像は、ナーを言うとしたものが160 人中の81 名で51%である。43% のネーよりも8 ポイント多くなった。安芸のノーの状況からすれば、ネーとの併用のなかでよく生きているともいえる。

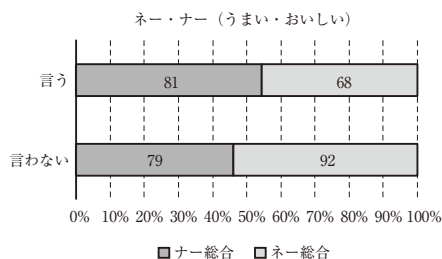


図 16 ネー・ナー使用率総合

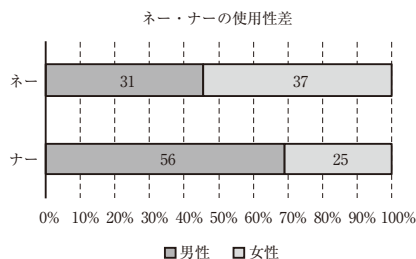


図 17 ネー・ナーの使用率性差

方言の動向をみるうえで、共通語との関係で「男の使う荒っぽいもの」という認識があれば、丁寧場面を中心に使用が制限されていく。それが女性により顕著に表れる。ここで、ネー・ナーの使用にかかわる性差を確認すると図 17 のようになる。単純比較すれば、ナーは男性に傾いている様子がわかり、丁寧志向のなかでネーに置き換えられていく可能性もなくはない。図 18 は3 世代で使用率の差をみたものであるが、これもナー・ノーで言うとしたもの実数を積み上げている。

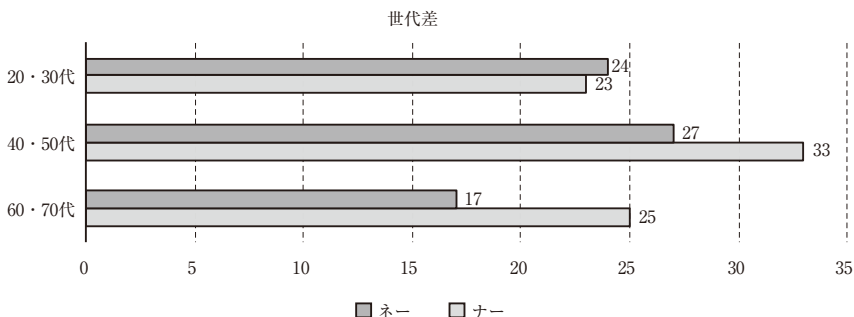


図 18 ネー・ナー使用率の世代差

ナーの積極使用層は40・50 代となっており、老年層のナーは、若年層とそれほど変わらない様子がわかる。単純に衰退する動きはみられない。むしろ、若年層のネーよりも老年層のネーが多くなっている。この質問項目では、老年層の回答場面によいいかたをしようとした傾向があったのかもしれない。これも今後の検討課題である。

4. まとめと今後の課題

本研究で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

(1) 「～でなしに」

福山市の約半数の回答者が「～でなしに」を「言うことがある」と回答している。「言わないが聞いたことはある」まで含めると、ほとんどの市民が言語生活の中でこの表現に接している。

男女別に見ると、「言うことがある」は男女とも高いが、男性の方がより高い。

年齢層別に見ると、「言うことがある」は若年層になるに従い一貫して減少傾向を示す。この表現の使用の衰退が現れている可能性が考えられる。

東京都と同様に調査したところ、「言うことがある」は1割程度に過ぎない。福山市と比べると使用者率は著しく低く、「～でなしに」は方言的な表現であることが確認された。

(2) 「(ページを) はぐる」

福山市の半数の回答者が「言うことがある」と回答しており、一定の使用者率が見られる。

男女別に見ると、使用者率は男性よりも女性の方が高い。

年齢層別に見ると、若年層になるに従い一貫して数値が減少する形での年齢層による違いが顕著に見られた。この表現の使用の衰退が年齢層の違いとして現れている可能性が考えられる。

この表現は日本中どこでも使っていると思うかと質問したところ、「そう思う」と回答した人は1割にとどまるのに対し、「そうは思わない」は約8割にのぼった。地域限定の表現(方言)と意識されながら使われている。

(3) 「離合する」

福山市の半数の回答者が「言うことがある」と回答しており、当地でも一定の使用者率が見られた。「言わないが聞いたことはある」まで含めると約7割が接している表現である。

男女別に見ると、使用者率はどちらかという女性よりも男性で高い。

年齢層別に見ると、「言うことがある」の数値は若年層になるに従い一貫して減少する。この表現の使用の衰退が年齢層の違いとして現れている可能性が考えられる。

(4) 終助詞「や」

友達を誘うときの「行こうや」のような終助詞「や」は、福山市の約8割の回答者が用いており、非常に一般的な終助詞である。また、方言形の終助詞「で」も一定の勢力を持っている。

男女別に見ると、女性も約6割が「や」を用いているが、男性はさらに多い約9割が用いている。「や」は基本的に男女共通に用いる表現であるが、相対的には、女性よりも男性の使用者率が高い。他の終助詞の使用まで含めて分析すると、男性は主と

して「や」（と「で」）を用いるのに対し、女性は「や」とともに「よ」もよく用いる。

年齢層別に見ると、「や」の使用者率は若年層になるに従い一貫して上昇し、20・30代では約9割に達する。一層定着に向っている可能性が考えられる。

東京都と同様に調査したところ、「よ」の使用者率は約9割にのぼるのに対し、「や」は約1割にとどまることから、「や」は方言としての表現であることが確認された。男女別に見ると、男性の使用者率は2割程度あることから、使うとすれば男性であることがわかった。また、年齢層別に見ると、10代で数値が上昇しており、低文体での表現として東京都でもある程度普及しつつある可能性が考えられる。

(5) ai 連母音の融合

備後域方言の特徴として示されることの多いai連母音融合は、備後域でもとくに尾道では若年層を中心に衰退傾向がみられた。福山もそれに追従する動きがあるかとみられる状況だが、意味的にネガティブなもの、語より文表現的な陳述にかかわるもののなかで、語彙的なかたちで残存する可能性がある。

(6) ナ行文末詞

岡山から備後にかけて用いられるナーは、福山では、ネーとの張り合い関係のなかにあっても一定の勢力を保っていると考えられる。中年層の社会的活躍層に老年層より多い使用率が見られたことからしても、ネーに押される気配をみせつつも、一挙に交代するような状況ではないと考えられた。

今回の研究では岡山市との異同という発想から福山市を調査したが、本稿で分析対象とした表現は瀬戸内海沿岸において連続性を持ちながら用いられているものと考えられる。岡山市と福山市の間の地域、福山市から西の地域、岡山市から東の地域ではどのような状況であるのか、またその状況はどのような経緯で生じたのかを数量的観点から明らかにするために、岡山市・福山市の周辺にあるおもな地域でも同様の多人数調査が展開されることが望まれる。

注1 本稿は次のノートルダム清心女子大学研究助成および科学研究費補助金を受けて実施した研究成果の一部である。

- ・2013年度学内研究助成金（研究課題「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」【研究代表者・尾崎喜光】）
- ・2018年度研究助成金（研究課題「広島県福山市民の言語使用と言語意識に関する多人数調査」【研究代表者・尾崎喜光】）
- ・2019年度研究助成金（研究課題「広島県福山市民の言語使用と言語意識に関する多人数調査（追加調査）」【研究代表者・尾崎喜光】）
- ・JSPS 科研費 JP18H00673（研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」【研究代表者・尾崎喜光】）

また、本稿をなすに先立ち、次の口頭発表を共同で行なった。会場でコメントをくださった皆様に感謝申し上げます。

- ・尾崎喜光・灰谷謙二（2019）「福山市民の言語使用と言語意識に関する調査報告（1）」（「ノートル

ダム清心女子大学 日本語日本文学会 第22回大会」)

- ・灰谷謙二・尾崎喜光 (2019)「福山市民の言語使用と言語意識に関する調査報告 (2)」(「第11回
おのみち文学三昧 尾道市立大学日本文学会大会」)

参考文献

尾崎喜光 (2014)「岡山における連母音の融合状況 (2) - 「岡山市民調査」から見る - 」『清心語文』
16

——— (2017)「岡山市における話し言葉の男女差」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日
本文学編』41-1

——— (2020)「岡山市・福山市における方言使用に関する社会言語学的研究—動詞打消し、打消し
過去、アスペクト—」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』44-1

小学館辞典編集部 (1989)「音韻総覧」『日本方言大辞典』小学館

中崎崇 (2014)「終助詞「や」についての覚書」『就実表現文化』8

藤原与一 (1974)『瀬戸内海言語図巻』東京大学出版会

松川真由 (2009)「広島県福山市方言の圏域性と動態についての研究」2008年度尾道大学卒業論文

(おざき よしみつ／本学教授)

(はいたに けんじ／尾道市立大学教授)

キーワード＝福山市、岡山市、方言、多人数調査